

2017年10月5日(木)
書き直される中国現代史
東大駒場キャンパス8号館210教室

日清戦争史研究の展開

中京大学法学部 檜山幸夫

1970-90年代の 日清戦争史研究

日本史の立場からみた視点

- I. 研究史(世界史的視点)
- II. 研究環境(史資料の公開)
- III. 階級闘争史観と実証論的史学(外交史研究)

日清戦争に対する中国の歴史認識の変遷

川島真「中国における甲午戦争百二十年史研究」

(『東アジア近代史』大会シンポジウム特集)

日清戦争史研究の政治化



中国での日清戦争史研究が「公的な」言説として政治化している

中国では日中戦争よりも日清戦争が重要な『歴史戦』の争点として認識されつつある



台湾問題、尖閣諸島問題、沖縄の位置付け、海軍の海洋進出などといった現在の中国にとっての緊要の課題の多くが日清戦争に関わっているから

中国の日清戦争認識

階級闘争史観と帝国主義侵略史観が歴史叙述の基調

日本＝侵略者・中国＝被侵略者
朝鮮半島の支配権をめぐる日清間の相克とは捉えない。

2010年前後から変化

日清戦争史研究の政治化が図られてきた
日清戦争120周年では、領土問題・沖縄の帰属問題・台湾問題に日清戦争史研究が関連付けられた。

日本の対中侵略→日清戦争を起点に第二次世界大戦を終点とする単純化された歴史観。

日清戦争に対する台湾の歴史認識の変遷

若松大祐 「現代台湾史における甲午戦争と乙未戦役—中国の命運から台湾の命運へ」

(『東アジア近代史』 大会シンポジウム特集)

**台湾の主権者をめぐる論争
「誰が台湾を統治するのか」**



日清戦争の歴史評価の原理

中国国民党支配から民進党政権



1994・95年と2015年の日清戦争の歴史的位置付け



『中国の命運』論から『台湾の命運』論への変遷

1994年甲午戦争一百週年紀念学術研討会

国立台湾師範大学歴史研究所・歴史学系

中(清)国と日本との戦争54.6%

台湾乙未戦役21.2%

2014年甲午戦争馬関条約与台湾変局研討会議

台北・李登輝基金会

台湾の主体性・台湾人自らの歴史観

一個の独立した台湾人

鉅変1895

台南・国立台湾歴史博物館

2015.5.6—12.13

台湾人の台湾における重大な歴史的事件
としての乙未事件・客観的・自由な台湾

参 照

拙稿

「日清戦争に対する『歴史認識』について」

(『東アジア近代史』第21号、

2017年6月・1頁～16頁)

1970-90年代の 日本における日清戦争史研究

帝国主義的侵略国家化



階級闘争史観と実証論的史学

I. 研究史

遠山茂樹(1963年歴史学研究会大会「東アジア歴史像の再検討」)が東アジア近代史上での日清戦争の意義を再評価

日清戦争必然論

東アジア: 形成期の帝国主義体制に組み込まれる



朝鮮問題が媒介

中国: 帝国主義世界体制の矛盾の焦点に転化し
半植民地化

日本: 軍国主義と帝国主義への転化

1. 中塚明

階級闘争史観

日清戦争必至説

(1)「日清戦争」

『岩波講座日本歴史』17、1968年1月

- ①国民的世論
- ②戦争目的
- ③開戦外交
- ④講和の条件
- ⑤アジアの圧迫国へ

(2)『日清戦争の研究』

1968年3月、青木書店

- ①専制天皇制の朝鮮侵略と日・朝両国人民の
動向
- ②日清戦争をめざす専制天皇制
- ③日清開戦外交
- ④日清戦争中の日本政府の対朝鮮政策
- ⑤日清戦争戦史の基本的諸問題
- ⑥日清講和条約
- ⑦アジアの圧迫国へ

① ア 日清戦争の歴史的 position 付け

「明治初年いろいろの専制天皇制の対朝鮮・対中国政策の一応の決算とみなすべき戦争」(2頁)→**必然的開戦**

② イ 執筆目的

「日清戦争の全過程、すべての局面を、専制天皇制の政治の延長として解明」(3頁)

③ ウ 日清戦争を position 付け

「絶対主義天皇制の主導のもとに、もっぱらその軍事力によって行った帝国主義的侵略戦争」(291頁)

① 考察視点＝階級闘争史観

「日清戦争が必然となったのかを明治初年いろいろひろげられてきた日本の階級闘争の歴史を通じて明らかに」する(13頁)

② 開戦必至論・用意周到論

開戦を目指した日本の開戦外交論

「天皇制政府がいかに周到にこの戦争を準備したか」(2頁)

③ 専制天皇制官僚

日清戦争の全過程において「天皇制官僚の独自の役割がきわめて大きい」「戦争の主導権は専制天皇制の官僚・軍部にしっかり握られていた」(289頁)



「専制天皇制官僚の第一人者であった伊藤(博文)」(122頁)

①戦争目的

主権線と利益線→「朝鮮の政治的・軍事的
制圧」

「国家独立自衛ノ道ニ二途アリ、主権線ヲ
守護、利益線ヲ保護」(1890年12月6日山
県有朋首相の第一議会の施政方針演説)

主権線→国の疆域

利益線→主権線の安危に密着の關係
する区域

山県「外交政略論」(1890.3)→「西伯利鉄
道完成ノ日ハ即チ朝鮮ニ多事ナル
ノ時…朝鮮ノ独立ハ之ヲ維持」

⑥開戦外交→目的化された開戦

「日清戦争の開戦をめざす、めまぐるしい開戦外交が展開」(105頁)

⑦内政の危機を外に転じる

「朝鮮にことをおこせば『対外硬』派の目を外に転じる」(110頁)



国内政治を、殆ど実証的に論じられていない



国内世論は新聞・雑誌の分析が不可欠

④ 奇襲による開戦＝開戦外交

「日清戦争の開戦は天皇制政府・軍隊にとって、周到に準備された」(222頁)



「先制攻撃から始まった」(大谷・57頁)



日露開戦・日米開戦が前提

→日本の戦後史－敗戦のトラウマ



橋本明子『日本の長い戦後』

みすず書房・2017年

④ 奇襲による開戦の意味

「豊島沖の奇襲による日本軍の勝利は、日本海軍が清国海軍にくらべて劣勢ではないか、と懸念された不安・疑心をぬぐいさり、日本国民の対清戦争への士気を高めるのに大いに貢献した。豊島沖の勝報が七月二十九日に報道され、国民がわきたつなかを衆議院議員の臨時総選挙の布告があり翌日宣戦の布告がなされたのも、最初の海戦の勝利でたかまつた士気を最大限に、国内の政治支配に利用し、国民を戦争に協力させようとするたくみな演出」(229頁)

① f 日清戦争後の日本

「日清戦争に勝利した日本は(朝鮮・中国)を侵略し圧迫する国にかわった(が、それにより)ロシアとの対立をひきおこし、朝鮮・中国人民の反日抗争の激化に直面し、戦争の最大の眼目であった朝鮮の支配も実現することができなかった(のは)、天皇制絶対主義の史上稀な野蛮さと、冒険的な侵略政策がみずからまねいたもの」(306頁)



藤村道生の批判

書評「『日清戦争の研究』『機密日清戦争』」

（日本国際政治学会編『日本外交史の諸問題』

Ⅲ—『国際政治』第37号・1968年10月、

159頁～170頁）

①「戦争の歴史的起点を明治維新にもとめること」ができるのか。（中塚・13頁）

「維新の砲煙のおさまらぬうち」に日清戦争が策定されていたのか。（同上）

②「専制天皇制」の概念規定が曖昧で「絶対主義的天皇制」とどのように関係するのか。

（同・291頁）

1. 日本の歴史学界では「日清戦争」ではなく「日清・日露戦争」。



補助役でしかない「日清戦争」

2. 「今日まで日清戦争の具体的、実証的研究はまことに乏しかった」

(藤村「書評」、160頁)

中塚明は

1960年代、明治維新百年、栄光の明治、「明治大帝と日露戦争」への挑戦としての階級闘争史観



藤村の批判

清朝の朝鮮支配→袁世凱の朝鮮内政干涉

張佩綸の上奏書

長崎事件

依然として「日清・日露戦争論」



原田敬一『日清・日露戦争』岩波新書1044・2007年

2. 藤村道生

(3)『日清戦争-東アジア近代史の転換点-』

岩波新書880、1973年

- ①序章－日本軍国主義と東アジア
- ②日清開戦をめぐる東アジアの情勢
- ③陸奥外交
- ④戦争の経過と対朝鮮政策の展開
- ⑤清国領土への侵入
- ⑥下関条約と三国干渉、
- ⑦台湾占領と戦後経営、
- ⑧むすび－日清戦争の歴史的意義

(4)藤村道生「日清戦争」

(『岩波講座日本歴史』16、1976年)

- ①日清戦争の起点と終点
- ②日清戦争の動因
- ③日清戦争の諸時期

(A)戦争の構造

三つの戦争による三局面重層構造

「華夷秩序を打破し、朝鮮における支配権を清国と争う局面、朝鮮および台湾の領土を掠奪する局面、帝国主義列強と中国・朝鮮の分割を争う局面の重層化」(11頁)

はじめて戦争期間を提起した

① 国際法上の戦争

1894年7月25日豊島沖海戦

～95年5月8日講和条約発効

② 戦争ならざる戦争

1894年7月23日京城事件（日朝開戦）

～8月20日日韓暫定合同条款

③ 国内の戦争状態

1894年6月5日大本營設置

～96年3月31日大本營解散

（戦時大本營条例）

(B)時期

第一期 開戦外交 6月2日～7月23日

第二期 朝鮮における戦闘 作戦大方針

第三期 清国分割の提起 第二軍の編成

第四期 三国干渉と戦争の終結

(C)開戦の意思決定

7月17日大本営御前会議

(D)開戦

対韓最後通牒(7月19日-22日)と

対清最後通牒(7月19日-24日)

3. 信夫清三郎編『日本外交史1853-1972』

毎日新聞社・1974年

信夫清三郎・中山治一・藤村道生・毛利敏彦・
岡本宏・安部博純・谷川栄彦

☆ペリー来航から1972年までの120年史

☆日本外交史の鳥瞰図を描き通史を編む

☆1969年1月から共同研究、70回余りの研究会
や討議

☆1971年5月6日日本国際政治学会で「近代日本
外交史の時期区分」(『国際政治』1972年・日本
外交史研究会)

- ①序論開国前夜の国際関係(三つの国際秩序
—華夷秩序・ヨーロッパ国家系・大君外交
体制)
- ②開国
- ③万邦対峙
- ④大陸政策の形成
- ⑤脱亜入欧
- ⑥日清戦争
- ⑦日露戦争
- ⑧帝国主義政策の展開と国際関係の再編成
- ⑨第一次世界大戦(以下、下巻略)

4. 高橋秀直『日清戦争への道』

東京創元社・1995年

序論 日本近代化と大陸国家化

I. 近代化過程における外交と財政、

① 壬午事変と大軍拡計画の決定

② 甲申事変・巨文島事件と軍拡計画の再編

③ 初期議会期の朝鮮政策と財政

II. 日清戦争の開戦過程――一八九四年夏――

① 開戦方針の決定

② 開戦外交

③ 戦争の見通しと朝鮮政策

課題 近代化＝自立と大陸への侵略は不可分の関係か(3頁)

位置付け 日清戦争期は日本の大陸への政治的膨張の軌道がしかれた時期(3頁)

三つの問い

「日清戦争にいたる明治国家の歩み」を如何に捉えるか(6頁)

1. 「明治政府がこの時期、大陸国家化を一貫してめざしていたというのは事実」なのか？
2. 「日本の資本主義化、経済発展にとって大陸国家化は不可欠なもの」か？
3. 「日本をめぐる国際状勢は、本島に帝国主義国か、(半)植民地か、の二者択一を迫るものであった」のか？

結論

- ①「日清開戦直前までの明治国家の外交路線は、アジアへの政治的膨張、大陸国家化をめざすものではなかった」
- ②「日清開戦はここにいたるまでの明治国家の歩みの延長ではなく、むしろ断絶であった」



- ①a 平壤会戦の「大勝は陸軍にとっても実は予想外のものだった」(518頁)
- ①b 極東の安定的状況は、「清の軍事力への幻想」が前提で、「この幻想」が破れたことが「極東の危機の到来」(519頁)

- ③「戦争・三国干渉により国民の間に軍国主義・膨張主義が広く浸透」し、広島大本営による「天皇の戦争指導へのかかわりは、大元帥としての天皇イメージを国民にうえつけ、天皇を軍事的栄光で飾ることにより、天皇崇拝を国民のなかに深く浸透」(520頁～521頁)
- ④「日清戦争をへることで近代日本は、大陸膨張を国家目標とする軍国主義国家に生まれかわった」(521頁)
- ⑤「大陸への政治的膨張が近代日本の宿命であった」という論理は間違いであり「事実ではなく、近代日本の進みうる道は多様であった」
(524頁)

5. 大谷正『日清戦争』 中公新書・2014年

著述目的⇒概論的

「近年の日清戦争研究の水準をわかりやすく
読者に提示することを目的」(iv 頁)

- ①戦争前夜の東アジア
- ②朝鮮への出兵から日清開戦へ
- ③朝鮮半島の占領
- ④中国領土内への侵攻
- ⑤戦争体験と「国民」の形成
- ⑥下関条約と台湾侵攻
- ⑦日清戦争とは何だったのか

2. 研究環境

1. 史料

- ① 国立国会図書館憲政資料室→私家文書
- ② 国立公文書館→内閣文書
- ③ 外務省外交史料館→外交文書
- ④ 防衛庁防衛研修所戦史部図書館→旧軍文書
- ⑤ 地方公文書館→旧道府県市町村役場文書
- ⑥ 資料館・図書館等→自治体史編纂収集文書

2. 史資料

- ① 編纂史資料
- ② 復刻資料
- ③ 新聞雑誌→マイクロフィルム化と雑誌の復刻

3. 文献資料→日清戦争実記・広島臨戦地日誌他

1. 大きな役割を果たした史料

- ① 国立国会図書館憲政資料室→私家文書
陸奥宗光文書・伊藤家文書・伊藤博文関係文書・伊東伯爵家文書・伊東巳代治関係文書・憲政史編纂会収集文書
- ② 国立公文書館→内閣文書
公文類聚・公文雑纂→閣議書
- ③ 外務省外交史料館→外交文書
「東学党変乱ノ際韓国保護ニ関スル日清交渉関係一件」
「東学党変乱ノ際日清両国韓国へ出兵雑件」
- ④ 防衛庁防衛研修所戦史部図書館→旧軍文書
「混成第九旅団第五師団報告」
- ⑤ 宮内庁書陵部→「秘書類纂」(伊藤公爵家文書)

2. 史資料

① 編纂史資料

『伊藤博文関係文書』『明治天皇紀』『明治二十七八年日清戦史』『廿七八年海戦史』『靖国神社忠魂史』
『日本外交文書』『旧韓国外交文書』『清季中日韓間関係史料』

② 復刻資料

明治百年史叢書『伊藤博文伝』

③ 新聞雑誌→マイクロフィルム化と雑誌の復刻

3. 文献資料

『日清戦争実記』、『広島臨戦地日誌』

小川一真『日清戦争写真図』、久保田米遷『日清戦争戦闘画報』

1990年代の 日清戦争史研究の研究課題

1. 階級闘争論による研究方法論への挑戦
→単純化された構造論と開戦必至論への批判
実証的研究からのアプローチ
→歴史学研究の原点への回帰
2. 外交史研究の転換—外交交渉論からの転換
開戦外交・戦時外交・講和外交
↓
外交政略論と外交過程論からの分析

3. 研究の広がりと深化

領域の拡大

地方史・メディア史・社会史・文化史・教育史・
宗教史から文学や芸術の領域

連携—世界史的視点と協同研究

中国史・朝鮮史・台湾史やモンゴル史・ベトナム史・欧米各国史

深化 「日清戦争史」研究→いままで論じられてこ
なかつた課題の解明

4. 日清戦争史研究の課題

- (1)開戦 何故戦争になったのか、何故開戦は避けられなかったのか、どの段階で開戦が不可避となったのか
- (2)責任 戦争は誰が主導したのか
- (3)軍事 戦争の経緯と結果
- (4)社会 戦争の社会的影響は
- (5)国民 戦争動員・国民の軍事的な統合・国民の意識・戦争支援体制
- (6)戦死者 戦死者の慰霊と顕彰→軍人墓地と戦争記念碑

1994-95年
日清戦争百周年国際シンポジウム

1. 準備研究会

1993年5月23日

日本国際政治学会日本外交史研究分科会
桜美林大学

①「日清戦争の開戦過程」

高橋秀直

②「伊藤博文と日清戦争」

大澤博明

2. 月例研究会

1993年10月2日～1995年4月15日

- | | |
|------------------------------|------|
| ①「陸奥外交論」 | 中塚 明 |
| ②「開戦と民衆」 | 藤村道生 |
| ③「日清戦争をめぐる国際関係」 | 佐々木揚 |
| ④「日清戦争が中国の民心に及ぼした
影響について」 | 佐藤三郎 |
| ⑤「日清戦争と英国の外交政策」 | 廣瀬靖子 |
| ⑥「日清戦争と軍夫」 | 大谷 正 |
| ⑦「日清戦争と民衆」 | 檜山幸夫 |
| ⑧「地方行政文書」 | 水野 保 |
| ⑨「明治期東京府教育関係文書からみた
日清戦争」 | 井上直子 |

⑩「中国における日清戦争史研究の現状」

鈴木智夫

⑪「明治期東京府における人口流動と軍夫
調達について」

北原糸子

⑫「韓国における日清戦争史研究の現状と課題」

森山茂徳

3. 日本史研究会との共同研究会

1994年7月9日

京都

①「近代日本の中国・朝鮮認識と外交論」

伊藤之雄

②「日清戦争の賠償金について」

伊原沢周

③「小川又次の『清国征討策』について」

山本四郎

④「徳富蘇峰の中国観」

杉井六郎

4. 国内シンポジウム

1994年11月26日・27日

早稲田大学

- | | |
|-----------------|------|
| ①「日朝・日清開戦と開戦外交」 | 檜山幸夫 |
| ②「甲午戦争と清国」 | 栗原 純 |
| ③「日清開戦と英露極東政策」 | 佐々木揚 |
| ④「日清戦争と森鷗外」 | 酒井 敏 |
| ⑤「外征の図像学」 | 木下直之 |

パネルシンポジウム

「日清戦争研究の諸問題」

伊原沢周・原田敬一・檜山幸夫

5. 日清戦争と東アジア世界の変容 国際シンポジウム

1995年6月17日・18日

日中友好会館

セッションA 日清戦争と国際環境

- ①「東アジア史のなかの日清戦争」 濱下武志
- ②「中日甲午戦争と極東国際情勢」戴 逸(中国)
- ③「日清戦争をとりまく国際環境」 井口和起
- ④「甲午戦争と近代中国人の世界認識」
威其章(中国)
- ⑤「日清戦争期における東アジアの国際関係」
関 捷(中国)
- ⑥「日清戦争とイギリス」 イアン・ニッシュ(英国)
- ⑦「ロシアと日清戦争」 V・S・ミヤスニコフ(ロシア)
- ⑧「日清戦争下の陸奥宗光」
ゴードン・バーガー(米国)

セッションB 日清戦争と軍事戦略

- ⑨「軍事的視点からみた日清戦争」 原 剛
- ⑩「『日清戦史』参謀本部草案」 中塚 明
- ⑪「旅順虐殺事件」 秦 郁彦

セッションC アジアの人々にとっての日清戦争

- ⑫「東学農民軍の日清戦争への対応」
姜昌一(韓国)
- ⑬「日清戦争期におけるモンゴル」
K・L・ジャムスラン(モンゴル)
- ⑭「日清戦争と台湾」 呉密察(台湾)
- ⑮「日清戦争と沖縄」 我部政男
- ⑯「日清戦争と民衆」 大濱徹也

セッションD 総括討論

⑰「五十年戦争のなかの日清戦争」 檜山幸夫



東アジア近代史学会編

『日清戦争と東アジア世界の変容』上下巻

ゆまに書房・1997年

上巻

序文

大畑篤四郎

総論

「日清戦争の歴史的な位置—『五十年戦争』

としての日清戦争—」

檜山幸夫

第1章 日清戦争と国際関係

- | | |
|--------------------------------------|------------|
| 「東アジア史のなかの日清戦争」 | 濱下武志 |
| 「日清戦争をとりまく国際環境」 | 井口和起 |
| 「日清戦争と極東の国際情勢」 | 戴逸 |
| 「甲午中日戦争期における東アジアの国際関係」 | 関捷 |
| 「日清戦争による朝清関係の変容」 | 原田環 |
| 「日清戦争とイギリス」 | イアン・ニツシュ |
| 「第三次極東戦争(1894-95)とロシアの極東地域における政策の展開」 | V・S・ミヤスニコフ |
| 「英露の極東政策と日清開戦」 | 佐々木揚 |
| 「日清戦争前朝鮮条約関係考」 | 廣瀬靖子 |

第2章 東アジア世界と日清戦争

「日清戦争とモンゴル」 K・L・ジャムスラン

「近代東アジア国際関係における『宗主権』

—《日清戦争国際シンポジウム》における

ジャムスラン報告によせて—」 中見立夫

「東学農民軍の日清戦争への対応」 姜 昌一

「甲午戦争と近代中国人の世界認識」 戚 其章

「日清戦争が清国人心に及ぼした影響

について」 佐藤三郎

「日清戦争と台湾」 呉 密察

「日清戦争と日本」 檜山幸夫

下巻 第3章 日清戦争の戦争指導

- | | |
|--------------------------------------------|-----------|
| 「日清開戦論」 | 大澤博明 |
| 「日清戦争における外交政策」 | 檜山幸夫 |
| 「軍事的視点からみた日清戦争」 | 原 剛 |
| 「日清戦争と陸軍」 | 斎藤聖二 |
| 「日清戦争と陸奥宗光ーその心理的・歴史的側面ー」 | ゴードン・バーガー |
| 「日清戦争と李鴻章」 | 栗原 純 |
| 「『日清講和条約』及び「日清通商航海条約』についてー条文の背後にあるものを求めてー」 | 堀口 修 |
| 「日清戦時法下の在日中国人問題」 | 岩壁義光 |
| 「日清戦争と検疫」 | 安岡昭男 |

第4章 日清戦争の諸相

「『日清戦史』と参謀本部草案」 中塚 明

「旅順虐殺事件－南京虐殺と対比しつつ－」

秦 郁彦

「日清戦争と黄禍論」

松村正義

「日清戦争と森鷗外－『徂征日記』

を中心に－」

酒井 敏

「日清戦争と従軍記者」

大谷 正

「日清戦争と通訳官」

佐々博雄

「日清戦争の『戦利品』と東京府」

籠谷次郎

「日清戦争における教員召集関係資料

について」

井上直子

「軍夫の日清戦争」

原田敬一

長崎清国水兵暴行事件

明治19(1886)年8月13日と15日

清国北洋水師提督丁汝昌が率いる鎮遠・定遠・威遠・濟遠がウラジオストックへ巡航の帰路長崎に寄港、上陸した水兵数百名が暴行、これを取り締まった巡査と争闘、多数の死傷者を出した事件

背景

「清国は、朝鮮の内訌に乗じその宗主権を確保せんとし、頻りに巨艦を建造して我にその威容を誇示」

(春畝公追頌会『伊藤博文伝』中巻、1943年、508頁)

「李鴻章ハ其得意ノ戦艦ヲ日本ニ觀シテ懾伏セシメントスル一端ト為サント考ヘツツアリ・・・今度ノ事件ニ関シテハ甚ダ大イニ憤怒・・・今度コソハ日本ヲ一撃センナドト放言」(「日清交際史提要」-『日本外交文書

明治年間追補』第1冊、1963年、464頁)

暴動事件の概要

8月13日 午後8時半頃、清国海軍の水兵4・5名が寄合町貸座敷で泥酔し暴行、家財を破壊、丸山町巡査派出所からに急行した1名の巡査を水兵たちが暴行し逃走、その後10名ほどの水兵が派出所前にて騒ぎ、その中に巡査に暴行した**王兇**を兇見し逮捕するも、その際王は日本刀をもって抵抗し巡査が負傷する。王を浜町警察署に連行して後、清国領事館に引き渡す。

8月15日 午後5時、四百数十名の上陸した清国兵、市中を徘徊し乱酔暴行、一部が暴徒化し、警備中の巡査1名を殺害、さらに長崎警察署から派遣された森監督巡査を襲い殺害し、警察署を襲撃、日本の官憲と衝突、日本側の**死傷者29名(死亡2名)**、清国側の**死傷者50名(死者5名)**。



「公は万一の場合を慮り、青木をして海軍省に就き、我が軍艦の所在地を確かめしめた」

(『伊藤博文伝』中巻、1943年、508頁)

事件処理

第1段階 日本側は地方での突発的事件として処理

外務省取調局長鳩山和夫・内務省警保局長清浦奎吾・司法省刑事局長河津祐之を長崎に派遣。

8月19日・20日 日下義雄長崎県知事と蔡軒清国領事とで談判、清国の引き延ばしにより交渉纏まらず。

第2段階 清国政府は委員会を設置し、蔡領事・在上海英国法律師英人J.ドラモンド(日当清銀200両)・参贊官楊枢を委員に任命し、委員による交渉を要求(外交問題化)。→日下知事・鳩山局長・カーカード司法省

雇

顧問等を委員に任命

9月6日より長崎県庁で委員会を開催し交渉。

11月15日 議定書による事態收拾が図られたが清国が官憲責任者の処罰と被害者への救恤金の支給を要求して紛糾、委員会を中止（12月6日解散）。東京で井上馨外相と徐承祖清国公使とが商議するが決せず。

11月24日から陸奥宗光弁理公使が、12月4日には李鴻章北洋大臣が交渉に臨むが行き詰まる。

列強の仲裁駐日独公使フォン・ホルレーベンが調停

明治20年2月8日 協議成立

事件の犯罪者は日清それぞれの法律に従い処置し相互に干渉しないことと、相互に自国の犠牲者へ救恤金を支払うことで決着。

陸海軍連合大演習(大演習)

明治23(1890)年3月28日～4月2日

愛知県下で演習

想定 侵略軍—強大なる艦隊を有する二ヶ国連合軍が制海権を掌握し、伊豆大島・下田・淡路・和歌山に上陸。

主力は、東京攻略を企図して陸続大兵力を大島・下田に輸送して拠点を築き相模湾より上陸。

別侵攻部隊は、和歌山方面から上陸し東海道を急進し大垣を制圧し、増援部隊が知多半島に上陸し名古屋周辺で合流。

日本軍—各部隊は衛戍地に集結し、海軍艦隊は東京湾口・鳥羽港・馬関海峡を防禦

東軍(日本軍)

海軍 練習艦隊—金剛・筑紫・天竜・磐城・鳳翔・摩耶、
水雷艇(愛宕・小鷹・第一号艇・第二号艇・
第三号艇)

陸軍 第三師団・近衛師団歩兵第一旅団・同砲兵聯隊
(1中隊欠)・同工兵中隊

西軍(侵略軍)

海軍 常備艦隊—高千穂・扶桑・浪速・高雄・大和・葛城、
護送艦の比叡・海門・武蔵、
運送船の和歌浦丸・薩摩丸・新潟丸

陸軍 第四師団・近衛師団歩兵第四聯隊・同歩兵第三
聯隊・同騎兵2小隊・同砲兵1中隊

大演習

海戦

3月30日 神島付近(伊良湖岬と鳥羽港の間)で海戦、防禦艦隊を撃破し知多半島の武豊方面を占領して陸軍侵攻部隊の上陸を企図するが、風波強く、また防禦の水雷艇部隊の執拗な妨害により上陸が数時間遅れ、演習作業完了できず。

陸戦

3月31日 半田武豊湾より上陸の敵軍の部隊と、名古屋から迎撃した部隊とで交戦(乙川村・東阿久比村付近)、半田沖から大和・葛城が艦砲射撃で上陸部隊を援護、東軍敗北退却

4月1日 半田村で会戦

4月2日 愛知郡平針村で決戦・引き分け

天皇 音聞山にて観戦・塩竈神社にて講評

明治19年長崎清国水兵暴動事件時の 日清海軍軍艦戦備比較

清国

鎮遠	装甲砲塔艦	鋼	7314噸	6000馬力	14.5ノット	329人	明治14年
定遠	装甲砲塔艦	鋼	7314噸	6000馬力	14.5ノット	329人	明治15年
濟遠	巡洋艦	鋼鉄	2300噸	2800馬力	15ノット	202人	明治16年
威遠	砲艦	鉄骨木皮	1300噸	750馬力	12ノット	124人	明治10年

日本

浪速	巡洋艦	鋼	3709噸	7604馬力	18ノット	361人	明治18年
筑紫	巡洋艦	鋼	1372噸	2433馬力	16ノット	177人	明治13年
扶桑		鐵	3777噸	3650馬力	13ノット	345人	明治11年
大和		鐵骨木皮	1502噸	1622馬力	13ノット	229人	明治18年
金剛		鐵骨木皮	2284噸	2535噸	13.2ノット	321人	明治10年
比叡		鐵骨木皮	2284噸	2535馬力	13.2ノット	300人	明治10年
葛城		鐵骨木皮	1502噸	1622馬力	13ノット	114人	明治8年
海門		木	1367噸	1267馬力	12ノット	181人	明治15年

磐城	木	926噸	720馬力	11ノット	148人	明治10年
天竜	木	1978噸	526馬力	8ノット	251人	明治4年
鳳翔 砲艦	木	321噸	217馬力	7.5ノット	96人	明治4年
摩耶 砲艦	鉄	622噸	963馬力	10.25ノット	60人	明治19年
武蔵	鉄骨木皮	1502噸	1622馬力	13ノット	230人	明治19年
高雄 巡洋艦	鋼骨鉄皮	1778噸	2332馬力	15ノット	226人	明治21年
高千穂 巡洋艦	鋼	3709噸	7604馬力	18ノット	337人	明治25年

金玉均暗殺事件

経過

3月10日 金玉均、朝鮮国王の派遣した刺客李逸植が洪鐘宇と清国公使館員呉葆仁と謀り共に上海に密出国

3月27日 金、上海東和洋行に泊まる

3月28日 金、東和洋行で洪鐘宇に射殺される

4月14日 死体は凌遲斬・妻女処刑・洪鐘宇褒賞
(銭5万両下賜)

朝鮮国王の命令書問題起こる

5月20日 浅草西本願寺別院で金玉均法要

5月17日 自由党、政府に金玉均暗殺事件は主権侵害として対韓策につき追求

5月18日 立憲改進黨・中国進歩党犬養毅も同様に追求し、更に清国政府の処置（洪鐘宇と遺体を軍艦で朝鮮送還）は日本への重大なる侮辱→対清策を質す

5月30日・31日に政府答弁特に処置せず



対清対韓外交の現状維持論

国家の命運を決める開戦の決断は容易ではない

日清開戦



清国の軍事力脅威論(政軍の認識)・権力内部の対立—軟派と硬派(明治天皇・伊藤博文と陸奥宗光・川上操六・杉村濬)・天皇との軋轢・内政危機的状況(藩閥内閣批判と対外硬)・現状維持論的対韓対清外交・条約改正・財政(戦費)不足



朝鮮半島での戦闘→平壤会戦・黄海海戦→予想外の大戦果→第一軍第二軍の旅順攻略→戦略目標が不明確になる→英国の介入→米国の介入→講和条件のための戦闘

戦争終結条件をめぐる政府と大本營の対立



戦略なき講和条件



陸軍の遼東半島要求と海軍の台湾要求の折衷案



結果から歴史を紐解くのではなく、初めから丹念に事実を検証し史料に基づいて論証していかなければならない。勿論、結論が先にあるのでは学問になっていない。



日清戦争研究が学問(歴史学)のなったのは1980年代からであった。